

報道され、静岡の朝鮮通信使のことが釜山で話題になり始めた。これが釜山文化財団と静岡との交流の始まりである。

その後、釜山文化財団の傘下にある朝鮮通信使学会で講演を数回頼まれ、私は韓国で「朝鮮通信使と徳川家康の平和主義・平和外交」という文言を常用し、学会でも表題にして講演すると、そのような歴史は知らなかったという声があり、清見寺には韓国から学生や市民の団体が訪れるようになった。

静岡県文化財の指定

ユネスコへの登録申請が話題になる前の2005年8月、韓国東亜日報東京支社長と駐日韓国大使館参事が清見寺で通信使の資料を観ながら韓国語で「自分たちだけで観るのは勿体ない」と言うので、同席した清見寺の一条和尚さんに「文化財に申請しても良いか」と聞くと「よろしくお願いします」という言葉が返ってきた。その事が同月16日の東亜日報一面に大きく報道された。私は、清見寺を申請者とし、それに賛成する15人の関係者の名を添えて静岡県文化財に申請し、教育長との質疑応答の役を演じた。

このように何時も韓日両国を描きながら事を進めてきたが、私は国籍が韓国なので、ユネスコ「世界の記憶」への登録申請に際しては韓国側の委員として関わった。

家康と松雲大師との出会い

関ヶ原の戦いに勝った家康は秀吉の侵

略戦争で国交断絶状態にあった朝鮮王朝との国交回復を対馬藩に内々に命じ、対馬藩主・宗義智は家康の名義で朝鮮王朝の王に国書（書契）を出し、使者も数回使わしたが、朝鮮王朝ではその国書に疑問を抱き、①国書を求め、②文禄慶長の役のとき朝鮮の王陵を盗掘した犯人を差し出し、③日本に連行された朝鮮人を帰国させるという三つの条件を出した。国書は家康の名前で書いてあったが、対馬藩内で偽造したとされている。盗掘の犯人を二人送ったが、二人は朝鮮に来たこともないと否定した。連行された朝鮮人は、その前後に内々に送り返して誠意をみせていた。

朝鮮王朝は、事実確認をするために松雲大師を代表とする探賊使を対馬に派遣。家康は一行と京都の伏見城で会うことになった。1605年に家康と松雲大師は会い、二人の間に信頼が通じ、松雲大師は帰国した。私は「二人の出会いが朝鮮通信使を生んだ」という語録を作り、常用している。

一次資料である『通航一覧』に「日本主君家康公、島主（対馬藩主）義智及柳川調信（しげのぶ）に命じて曰、日本朝鮮和交の事古来の道也。——中略——通交は互いの両国の為なり。先ず対馬より内々書（国書）を遣し尋試み、合点すべき意あらば、公儀よりの命と申すべしとあるほどに、対馬より私（ひそか）に書を渡す」（括弧の注は筆者）とあり、対馬藩が家康の名を無断で使っていないことが判る。

ユネスコ記憶遺産登録の舞台裏

朝鮮王朝は第1回から3回までの使節団の呼称を「回答兼刷還使」と呼び、使節団の呼称は一定していなかった。

通信使の共通の呼称がないことが国家間の摩擦になったことは一度もない。国書が家康の名で対馬藩で偽造されたと言われているが、その問題は家光が江戸城で裁き、対馬藩と藩主には咎めがなく、国書を偽造や改造だと訴えた臣下の柳川たちは裁かれ東北に流された。

釜山の朝鮮通信使学会で講演した時、呼称の見解を求められて「日本通信使といったら皆さん判りますか？日本から数百人の団体が朝鮮王朝に来たことはありません。私は朝鮮通信使で良いと思います。」と答えた。そして日本で朝鮮通信使は江戸幕府への朝貢使節団だという声はあるが、それは市民の勝手な言い分であり、歴史学会や国のレベルでは呼称の問題で摩擦を起こしてはいないと説明した。

ユネスコ記憶遺産に通信使の歴史文化遺産の登録申請をする直前に、呼称問題が議論され、漢字では「朝鮮通信使」、それを韓国語で読むと「CHOSEON TOGSHNSA」、日本語で読むと「CHOUSEN TSSUSHINSHI」になるので、それぞれ使い分けることに決まった。これで呼称が統一された。

ユネスコへの登録目録に国書を含めるかどうか議論された。私は韓国の関係

機関に「国書は朝鮮通信使のシンボルである。主役である。それを目録から外すことは朝鮮通信使を否定することに必要」と進言した。結果的に改竄されていない国書と改竄した国書の両方を目録に含めることになった。

2007年に朝鮮通信使400周年記念事業委員会委員長を委嘱され、その事業は大成と評価されたが、その後はサポート役に徹し、再現行列は現在、NPO法人AYUDROOMが主導している。隣国が200年を越えて摩擦を起こさなかった平和時代を築いた歴史文化遺産は世界でも稀であり、世界の宝であると信じている。この宝を活用する知恵を出しあつていきたい。



2007年は駿府城と清見寺周辺で朝鮮通信使行列が再現された。